神社の宗教的價値

神道本局管長　神崎一作

一

私は茲に神社の宗教的價値と云ふ標題を掲げたが、第一に先づ神社は宗教なりや否やが問題である。西洋の宗教學者などは勿論之を宗教であると斷じてゐるが、翻つて我が日本の制度の上から觀ると甚だ之に矛盾を感ずる。そこで神社、從つて又神社神道は宗教なりや否や、若し假に宗教であるとするならば如何ほどの價値を有するかゞ問題として議せられる次第である。私は此の事について、專ら常識的に述べて見たいと思ふ。

今先づ、第一の問題は暫く之を不問に附するとして、第二の問題を決定するに當り、最初に要件となるものはといへば、それは價値判斷の標準である。卽ち或る宗教が學問上合理的で、且つ又其の教理が高尙ならば、直ちに之れを以て價値ある宗教と稱すべきであらうか。或は又、社會教化上、或る宗教が

一般文化を進ませるに力があるものならば、之を價値ある宗教として推すべきであらうか。更に又、其の立教者即ち教祖の人格が高潔偉大であるならば、其の宗教は價値ありと云ふべきであらうか。其の依つて以て價値を判斷する尺度が確定してゐなければ、適正なる決定は與へられるものでない。ところが此の價値判斷の標準が現在如何に定められてゐるかと云ふと、各人各様であつて、一般に通じて定則的な標準は存在しないのである。そこで人々の觀察點如何によつて自づから價値の判斷に差異を生じて來る。斯かる次第であるから、私が茲に神社の宗教的價値を論ずるに就いても、如何なる標準に依るかといふことが、當然問題となるが、私は今、内容を解剖して批判的に論定することをせず、只神社及び神道と他の宗教とがどういふ點に於て相似してゐるかを比較して見て、其の點について聊か管見を述べて見たいと考へる。

西洋ではダーキンの進化論が現はれて以來、宗教も亦進化の原理、自然淘汰の法則に從つて進むものであると考へられ、時代の文化が進めば、それに伴はれて宗教も自然的に進化するものとされた。即ち草木禽獸或は自然現象其のものゝ尊拜から、やがて多神の信仰に移り、多神教は更に進んで一神教となり、一神教は又汎神教に進むのが、凡ての宗教を通じての進化過程であると說かれるに至つた。これは今日でもキリスト教國では殆ど萬古不易の定則であるかの如く信ぜられてゐる標準であつて、彼等は自

分等の奉じてゐるキリスト教が一神教であるといふ立場から觀て、祖先崇拜教や多神教は、野蠻時代の遺物たる低級の宗教であると論じてゐる。スペンサーなどは可なり廣い範圍に亘つて各種の宗教を研究もし、又十分にそれ等について思考を煉つた上で立論したであらうと考へられるが、併し果して西洋人の云ふやうに、一神教のみが進んだ宗教であり、價値の高い宗教であるとする觀方が正しいか否かは大なる疑問である。

彼等の此の標準から觀れば、我が神道の如きも、既に八百萬の神の存在を認めてゐるのであるから、立派に多神教であるが、しかし多神教を低劣と見るのは前にも述べた通り、キリスト教國が憑據してゐる標準であつて、決して絶對的なものではないばかりか、更に神道を他面から觀て、日本人が凡ての神德を天照大神御一方に歸納し奉り、神々の中の最も尊貴なる神として專ら天照大神を尊信する考への方から云ふと一神教的性質もあり、更に又、古事記々載の如く天御中主神から高皇産靈・神皇産靈の神が別れ、萬神が現れたとすると汎神教とも見られる。斯の如く我が國の神道は、其の觀察の立場を異にすることに因つて、各別異の性質が認められるのであるが、それがキリスト教・佛教の如く單一に明白でない所から種々の議論も起るのである。

二

神道は之を概括的に觀ると、支那の宗教、又は猶太教・回々教などに類似性を持つてゐるが、就中最も支那の宗教に似てゐる。

曾て故久米邦武氏は神道は祭天の古俗であると斷じて反對を受けたが、支那の宗教には確に天を祭る風習があつて、天に對する考へが頗る濃厚である。ところが我が「古事記」を見ると、神々の在られる最も神聖な場所は高天ヶ原である。德川時代の學者たる新井白石は之を常陸國にありとし、或る學者は別に又大和説を立てたが、一般の國學者は高天ヶ原とは天上を指したものであるとしてゐる。斯う云ふ風に神道は、天を尊信する點に於て頗る支那の古俗と似てゐるのであるが、更に廣く觀察すると、天に對する考へは殆ど凡ての宗教にある。キリスト教の天國は云ふまでもないとして、猶太教でも創世の昔に於て神は第二日目に天を造つたとしてゐるし、波斯教に於ても、世界創造の第一次に於て天が造られたと説いてゐる。婆羅門教の諸天、例へば梵天とか忉利天などゝいふ天は、我が日本でも普く知られてゐる。斯く一般宗教に通じて高い天上に神を考へるのは、最も自然的な考へであつて、此の點に於て我が神道は、世界の他の宗教と著しい類似點を持つてゐるのである。

三

次に神道では罪穢を厭うて之を祓ひ清めむとする風習があるが、これも亦一般に通じて存在する所で

ある。一例を擧げるならば、佛敎の灌頂がそれである。灌頂は密敎の儀式で、王朝時代にはこれが盛に行はれてゐるが、兎に角其の儀式は人の頭頂に聖水を灌ぐのである。最初は單なる入信の形式で行はれたものらしいが、後には結緣灌頂の外に、傳法灌頂なるものが出來て、自ら灌頂を受けると同時に他にも之を施し得る資格を享受することにもなつた。何れにせよ其の根本の趣意は我が日本の禊祓と同じく、罪業を除いて心身を淸くすることにあるらしい。さすればこれはキリスト敎の洗禮とも甚だ相類似したものである。マホメット敎でも淸潔を尊む齋戒の思想は頗る强い。私は支那で同敎の寺に行つて見たが、其の宗旨の寺では一切豚を食はない。これは明らかに穢を避ける思想から來てゐる。毎年定例の大儀式が執行されるのは三月若くは四月であるが、其の頃には日毎に二三回も入浴する。我が日本の伊勢でも大切な祭事に從ふ神官は上圃の度毎に湯に入つて淸めると云ふ事であるが、マホメット敎でも之と同じく、上圃すれば湯に入る習慣である。禊の風は又、支那にもあつた。支那の禊は專ら河岸で行はれたもので、黃河・楊子江の流域で禊をした事が古書に見える。北平に行つて見ると有名な天壇の入口には我が日本の神社の祓所に相當する禊所がある。皇帝が天を祭る前には、先づ此の禊所に到つて禊をするのであつて、これは代々頗る嚴重に施行されたものである。又支那では祈年祭をする場所として祈年殿といふものがあるが、其の祭の前には、これ亦禊を行ふたもので、其の事實は文獻其の他によつて明らか

に分つてゐる。さすれば此の禊祓といふことも一般の宗教に通有の事實であるが、それが殊に我が神道では重視せられてゐるのである。

第三には卜筮の事である。これは我が日本の外、支那にあつて、而も頗る相似てゐる。日本のは諸冉の二尊が蛭子を生んだ時に御心に合はないため太占に卜へられたと成つてゐる。此の御占に於て注意を要するのは、尊の御心中に於て既に御決定になつたお考へが、卜には如何に現れるか、即ち御自身の御決意と神意とを合はせ考へようとせられてゐる御事である。判斷の正否に關らず卜を信ぜられるといふのではなく、單に之を參考とせられるに止まる事である。ところが支那の卜筮の古意は正しく其の通りである。詳細の事は尙書の大禹謨を見れば分る。斯ういふ風に日本と支那との古卜法は互に相似てゐるのであつて、只異る所は我が國では古く鹿の肩胛骨を灼いて其の龜裂の象形により判斷したのに對して、支那では專ら龜卜の法に依つた事である。

第四には祖先を敬祭することである。これは我國に於て最も重しとする所であるが、支那でも同樣に此の事を尊重する。舜典には舜が巡狩から歸つて其の事を堯帝の廟に報告したことを記し、又、舜が初めて帝位を讓られた時の事も「位ヲ文祖ニ受ク」と記してゐる。古事記を見ると、何々の神は何某の連が祖と持ちいつく神と云ふやうな記事が多く見えるが、これは隣邦支那で祖廟を重んずる精神と酷似し

てゐる。社卽ち土地の祭も兩國互に相似てゐることの著しいものである。社の祭は春に於て行はれるが、此の日各村落では少童が寄り集まつて太鼓を敲くのであつて、宋人の詩に「社鼓鼕々」とあるのは此の事である。これは恰も日本の稻荷祭の氣分に似てゐると思ふ。

第五には山嶽崇拜である。これは勿論祭天の考へから來てゐる。天の高きを以て尊しとするならば、天に次いで高い山が尊まれるのは當然である。支那では五嶽と云つて、泰山、華山、衡山、恆山、嵩山の五つの山嶽が尊まれてゐるが、其の中でも殊に泰山を以て重しとし、古へは天子巡狩して此の處に天を祭つた。此の泰山については別に面白い話もあるが省略する。

四

以上私は第一から第五まで五項目に亙つて、日本と支那其他との宗教の相似た點を列擧したが、我が國の原始信仰と支那あたりのそれとを比べて見て相異る點は、自然に對する考へ方である。私は日本では、自然尊拜の對象たる神々が、神武天皇頃には、既に天照大神御一神に歸一してゐたのでないかと思ふ。卽ち古代日本にあつては、草木國土山川皆神ありといふ考へで多神教的であつたが、其の神々に對する尊拜の考へが次第に太陽神の一神に鍾まつて一神教的の傾向を持つたと同時に、他の一方では、祖先に對する考へも、祖先中の最も重い祖先である皇室中心的となつて、此の二つが合致し、太陽神を天

照大神に配し奉ることゝなつた。これが卽ち神道の中軸を成してゐる思想の特質ではないかと考へられる。さればこそ、日神、天照大神、皇室と此の三つは脈絡相通じて、何れも共に日本民族の最も尊重すべき標的とされてゐるのであつて、神武天皇の御東征に當つて、日に向つて戰へば皇師振はず、日を後に負うて戰へば連戰連捷したといふ如き、日輪と最も關係の深い八咫烏が、天照大神の御使と現れて皇軍を嚮導した如き、御卽位の時に皇祖の靈、天より降りて朕が躬を光し助けたりと宣はせし如き、此の連絡を腦裡に置かずしては到底理會し得られぬ事である。なほ神道の起源、又、神社の起源については、幾多の考ふべきことがあるが、兎に角神道とは以上の如き性質を持つてゐるものであつて、其の祭場であつた神籬磐境が、後に發達して建築物の形を持つ具體的な神社となつたのである。さすれば今日の神社は、勿論宗教的信仰の對象として起つたものであることは明らかである。

ところが佛教が渡來して勢力を得るに及んで、寺院が綜合的布教機關となり、神道宣傳の樞機までも握つた。そこで德川時代に天主教禁斷令が布かれ、國民全般に亙る宗門調べが行はれた時の如きは、寺院が各神社の氏子をも取調べて、氏社以外別に菩提寺を定めさせた。だから白川家の如きすら、其の例から免れることを得なかつたのである。斯の如き佛教が神道を併呑したやうな形は、既に各大社に神宮寺の附屬された時に發してゐるのであるが、德川時代には、それが最も顯著に現れたのである。

明治維新の神佛分離は、此の不正常な併合狀態から、神社と寺院とを別々に引離して、本然の獨立狀態に歸らしめたものであるが、これが爲に神道には布敎機關卽ち宗敎としての宣傳機關がなくなつた。そこで神道は表面上は宗敎でない事になつたが、しかしそれは只制度の上だけの事で、國民の腦理に存する神社は依然として宗敎信仰の對象であるから、其處に種々の不便が感ぜられた。明治五六年の頃に神道の講社が出來たのは之が爲であるが、次いで明治八年には講社が敎會となり、それが漸次に發達して明治十五年には敎派となつた。今日の所謂神道十三派は斯くして出來たのである。

さて、神道敎派成立の次第は右の如く神佛分離の一面の結果であるが、然も神社が布敎機關を失つて尙且國家的なものとして殘つた結果は、他面に於て信敎自由の原則に反する事となつた。明治七年に基督敎宣敎師に使はれてゐた某が基督敎の儀式に依つて葬儀を執行した事が現れて裁判の結果二圓五十錢の罰金を課せられたのが端なく動機となつて問題が囂しくなり、遂に信敎自由の布令が出て、其の後は基督敎の敎會も出來たが、それ以來、神社を宗敎的のものとして置くと宜しくない、目前急要に迫られてゐる條約改正の目的を達するためにも不利であるとして、神社は宗敎的對象ではないと云ふ事を宣言した。今日、宗敎法案又は宗敎團體法案に於て神社の事が屢々問題に上る前提には、實に斯ういふ過程が存したのである。しかし前にも述べた如く、元來神道は宗敎として起つたものであり、同時に又實質

的には宗教である。然らば神社問題は如何に之を考ふべきであらうか。

私は神道は佛教渡來の爲に其の宗教的職能を奪はれて、少からず其の發展を妨げられてゐると思ふ。若し神道それ自身の立場に於て純粹に發展の道程を歩んだならば、神道は早い以前に於て既に立派な一神教とも汎神教とも成つてゐたらうと信ずる。乍併ら之を本質的に觀るならば、神道は祖先を敬祭する祖先教であつて、國家と結びつき、民族と離るべからざる關係にある宗教である。だから何處までも國家精神、民族精神と相貫通する宗教として進ませることが必要である。西洋では祖先教は草昧野蠻時代の宗教で、程度の低いものであるとしてゐるが、それは一神教のみを標準とした見方で正しくない。

今日世界に行はれてゐる宗教は數多くあるが、何れも皆個人主義的基調の上に立つてゐるものである。それ等の中には學問的理論的に優れたものもあるが、空理空論の信仰で滿足するのならば兎も角、現實の生活と密接な交渉を持つ宗教としては、個人本位の宗教は眞の目的を達成する道ではない。此の意味に於て國家的民族的生活と脈絡相通ずる宗教として、我が日本の神道は最も右の要求に合致したる世界に誇るべき特殊の地位にある宗教であると思ふ。神道の宗教としての使命もこゝに存するのであつて、神道が宗教なりや否やといふが如き問題は、今更論ずるまでもない事であらう。